



大方あかつき館報

第25号
2016年6月発行

あかつき

特別寄稿

上林文学と仲間たち

高知新聞幡多支社記者 竹中 謙輔

「ここ半年くらい、小説を書いてワーっとなつたからって浮かれませんよ、僕ら」

お笑い芸人で芥川賞作家の又吉直樹さんの言葉である。又吉さんは、上林暁ファンを公言し、そんな縁から、昨年10月に黒潮町民大学に講師として参加した。

私は町民大学に合わせて高知新聞で特集記事を書こうと、又吉さんの資料を集めていた。この言葉は、テレビのドキュメンタリーで発言したものであった。

「僕」ではなく、「僕ら」と言ったことに私は引っかけた。この発言の趣旨は、お笑い芸人で10年くらい「ゴミみたいな扱い」を受けて来た。いま

さら注目されても「浮かれませんよ、僕ら」と言ったものだ。

「僕ら」とは、芸人仲間を指すのであろう。この感覚が、又吉直樹という人のキャラクターなのだ、強く感じる。芸人として、作家としても、常に仲間と一緒にモノを創っている意識ではないだろうか。黒潮町民大学の講演を振り返ってみても、その舞台に立ったのは仲間同士の三人だった。

又吉さんと不思議な縁を持つ、高知出身の出版社代表の島田潤一郎さん。又吉さんがファンという、フォークシンガーの世田谷ピンポンズさん。このイベントは、まさに三人がいたからこそ成立した。「又吉さんを一目見たい」「上林暁って誰だろう?」「何で黒潮町に?」…。聴衆全ての疑問に三人は答え、一つの濃密な空間を創りあげた。

三人はそれぞれに、尊敬し合い、仲間意識を持つ

ているようだ。島田さんは言う。「僕たちは、生きづらい世の中を生きて来た世代。90年代以降、社会が回らなくなり、異物は排除する風潮になった。その中で自分のスタイルを守っていかないと生きていけない。それは荒れた世相の中、筆一本で身を立てた上林さんの時代もそうだったはず」
こんな通底する思いが、三人を結び付けたのではないだろうか。そこに、時代を超えて、上林暁とつながるのである。

取材をして感じるのには、三人は決しておごらない。しかし、中心には、腹を据えた覚悟と、太い自信をうかがわせる。その中で、人への気遣いも忘れない。それは舞台の振る舞いを見れば、誰もが感ずることだろう。

上林さんもこんな人だったのではないだろうか。こんな気持ちにさえなった。

上林さんが書いた「田ノ浦舟遊び」という随筆にも、「田ノ浦の三秀才」として仲間たちが出てくる。その描写は温かい。「三人の仲の良いのもうらやましい」などと、小さな物語を繊細な言葉で書いている。

奇しくも、又吉さんらも三人。この三人も仲間を見る目が温かい。この三人の舞台を見て、上林文学の魅力は十分に若い世代に引き継がれているのではないだろうかと感じた。

三人は教えてくれた。上林文学に触れるものは、



「僕ら」と一緒に、文学の豊かな空間へと誘われるのである。

第26回「あかつき賞」受賞作品

小さいお母さんになってみて

南郷小三年 村上 陽花



十二月十八日に、一番下の弟のりょう太が生まれました。マラソン大会の後、もう生まれそうやった

けん、みんなで病院に行きました。みんなで病院の待合室で待ちました。しばらく待っていると、お母さんとおい者さんが出てきて、

「まだ生まれんけん、帰っちゃって。」

と言ったので家に帰りました。(いつ生まれるのかな?)と思って待ちました。

七時ぐらいに、生まれたので写真で見せてもらいました。元気そうで、ぶじに生まれてきてくれてよかったですと思いました。

それは、ちょっと前にお母さんがけがをして入院したことがあったからです。

入院している時は、おとうさんが、おかあさんの服やズボンを入れて荷物をしていたので、みんなですいませんでした。この時は弟のじゅんやとそうへいもいっぱい手つだってくれました。おかあさんがけがをして、(赤ちゃんはけがしてないかなあ)とか、(赤ちゃんやおかあさんはしんな

いろうか)とか考えてふあんでした。お母さんが心配で二人ともあんまり元気がなかったです。わたしもさみしかったです。でも、(お母さんが早く帰ってこれるように)と思っていっぱい手つだいました。

それまでにも、お母さんのおなかがつかえて、たいへんになってきたので、わたしはあらゆるものを手つだいました。全部あらってすっきりしたら、お母さんが、

「たすかるねえ。小さいお母さんやねえ。」

と言ってくれてうれしかったです。そして、せんとく物をたたんだりもしていました。いつもおとうさんが、

「すごいねえ。」

と言ってくれました。

手つだっていると、することがいっぱいあって、いつもお母さんやお父さんはたいへんだなあと思いました。

赤ちゃんが生まれてから、お父さんがごはんを作ってくれるので、かたづけはわたしとお父さんです。じゅんやが手つだってくれる時は、下の弟のそうへいも手つだってくれるけど、時どきしか、してくれませんでした。

みんなの分のあらい物を、あらってたいへんでした。いつもお母さんは、たいへんだなあと思います。せんとくをたたむのもたいへんでした。おとうさんのシャツは大きくてたたみにくかったです。

それから、りょう太をだっこして、

「ほうい。ほうい。」

「ねんねん、ねんねん。」とゆらしたり、右左に足ぶみをしたりしながらねくねてよ・・・)と思いながらゆらします。でも、りょう太はなかなかねてくれません。

(やつとねた)と思って、ベットにおいたらゆめを見ようみたいに小さい声で、

「えーん。えーん。」

となきます。

(また起きたー、またねらさないかん)

(いつになったらねるかなあ)とがっかりします。また、ゆらしたり歩いたり、りょう太をねらします。やつとねた時は(はあーつかれたなあ)とほっとして自分のことをします。するとお母さんが、

「えつねたが。上手、はるか。」

といってくれます。

でもこの前の雪の日に、わたしがりょう太をだっこした時、りょう太は足をブルブルさせていたので、(寒そう)と思って、モーフをかけてあげました。そしたら、右のほっぺただけ動かしてわらいました。りょう太がわらうのはじめて見たので、(やつとわらってかわいいなあ)と思いました。

お母さんが入院したり、りょう太が生まれたことで、いっぱいお手つだいをしたり、だっこをしたりして、お母さんの気持ちが変わりました。たいへんだったけど、これからもやれる時は手つだいたいと思います。

※4面に、受賞者の一覧を掲載しています。

2016 文学館の企画展

第21回企画展

「兄の左手となりて」

～病床の兄を支えつづけた妹・睦子～

期間 4 / 2 ～ 6 / 26

病床にあった兄・上林暁の執筆活動を、18年間支えつづけた妹・睦子。その著書『兄の左手』に描かれた世界を、館所蔵の生原稿や写真、書籍などで紹介する。

特別企画展

「生まれたときから下手くそ」

～安倍夜郎・なんちゃんない自伝的漫画展～

期間 7 / 2 ～ 9 / 4

同時開催▼「深夜食堂の世界へ」パネル展



四万十川のほとりに生まれ育った安倍さんが、なつかしい昭和を生きる父と子の姿を描いた感動の物語『生まれたときから下手くそ』や、おなじみ『深夜食堂』などの原画をはじめ、子ども時代に描いたマンガや漫画家からいただいた葉書な

ど、安倍漫画の原点をさぐる貴重な品々を多数展示する。

第22回企画展

「上林さんの恋」

～真少女・少女・禁酒宣言の女性たち～

期間 9 / 11 ～ 12 / 4

第23回企画展

「『ONL』につどう詩人たち」

～詩誌「おんる」創刊25年の軌跡をたどる～

期間 12 / 10 ～ (2016) 3 / 26

2016 主な催しもの

上林暁文学館

◇第14回上林暁俳句大会

日時 8 / 28 (日) 9時半～16時

会場 あかつき館

講師 味元昭次先生 (俳誌「蝶」代表)

◇上林暁文学講座

* 第一回『ずっと上林暁の小説を読んできた』

日時 5 / 29 (日) 13時半～16時

会場 あかつき館レクチャーホール

講師 山本善行さん (古書善行堂・店主)

* 第二回 1月下旬ごろ (予定)

◇上林暁の作品を読む会

(あかつき館2F会議室 / 14時～16時)

* 第13回 6 / 18 (土) 随筆「鏡」(故郷の本箱)

* 第14回 8 / 20 (土) 「弔ひ鳥」(全集16)

* 第15回 11 / 19 (土) 「真少女」(全集8)

* 第16回 2 / 18 (土) 「尊者」

(ツェッペリン飛行船と黙想)

◇第27回あかつき賞表彰式

日時 3 / 4 (土) 14時半～

会場 あかつき館レクチャーホール

黒潮町立図書館

□夏休み映画上映会

日時 8 / 6 (土)・7 (日)・8 (月)

会場 あかつき館レクチャーホール

黒潮町総合センター2F大ホール

(8 / 1のみ開催)

□秋の名画座「あかつき」

日時 11 / 12 (土) ①10時～ ②14時～

会場 あかつき館レクチャーホール

□人形劇団ブーク『ピンクのドラゴン』上演

日時 10 / 23 (日) 10時～12時

会場 あかつき館レクチャーホール

□感想画(似顔絵・イメージ)コンクール

募集 12 / 5 ～ 1 / 22

展示 2 / 13 ～ 2 / 23 * 2 / 27 ～ 3 / 11

会場 総合センター *あかつき館



あかつき館 * 催し点描

「花子 卒寿の記念展」

— 松下花子・書展 —

4月23日～5月29日、町民ギャラリーで、町内の書家・松下花子さんの卒寿を記念して個展が開かれました。三十年余、「筆の友」で研鑽をつんでこられ、応募展などで入選された軸や額装の作品を中心に20数点が展示されました。

GW期間中でもあり、町内外からたくさんの方々がみえられ、90歳のパワーに魅了されていました。



「第26回 あかつき賞」 受賞者決定!

今回で26回目を迎えた「あかつき賞」。町内7名の小、中学生が選ばれ、3月5日午後2時半から、レクチャーホールで、表彰式が行われました。

受賞者並びに作品名は、次のとおりです。

- 小1・松本大和 (田ノ口小) 「おほかの大そうじ」
- 小2・川村米音 (田ノ口小) 「朝早くからのおてつだい」
- 小3・村上陽花 (南郷小) 「小さいお母さんになってみて」
- 小4・長崎風恋 (三浦小) 「がんばるぞ、サッカー」
- 小5・濱村 愛 (三浦小) 「頑張っているお母さん」
- 小6・喜多海人 (佐賀小) 「平和であるために」
- 中3・秋田まお (大方中) 「戦後七〇年の今」



第20回企画展

『父が残した戦場日記』

～ニューギニア飢餓の戦場から、故郷へ～

1/10～3/27 (2F上林暁文学館にて開催)

ニューギニア戦線で戦死した父の手から、米兵に渡り、その後数奇な運命をたどりながら、戦後家族のもとに届けられた形見の日記。その日記や革のケース、写真、手紙など多数展示されました。

入館者の減る時期にもかかわらず、例年の倍近い800名余の方々が来館され、熱心にご観覧くださいました。



感想より

- ・戦死した若い父親の気持ちを、無念を、涙する。(三重・小谷)
- ・私の父も満州から九死に一生を得て帰国。殆ど語ることなく、余程つらかったことと思うばかり。(名古屋・水野)
- ・永劫に変わることのない人間の心のありようを、ずしんとつきつられた思いです。(四万十・渡辺)

館長日記

～プロゲ『クジラのあくび』より～

チェロの調べと『風の電話』の朗読と 2016.03.12

13:30～ 『チェロの調べと朗読の午後』、なんとなんと50名近い方々がエントランスに集まっている。チェロのIさんが、「アベ マリア」「故郷」「モルダウ」などを演奏してくれる。快い響きが、身体の隅々までしみ込んでゆく。演奏の途中、Oさんが、絵本『風の電話』を読んでくれる。しっとりとした朗読が、チェロの響きに乗ってひろがる。ひろいガラス窓をとおして、風にそよぐ木々が見える。ゆったりとした時間が流れてゆく。

猫と花

2016.04.09

白い猫が住みついている。職員が出て、素知らぬ顔で近づいては来ない。清掃のSさんの姿を見つけた時にだけ、尻尾をピンと立てて駆けてくる。そして、掃除をしているSさんの周りをじゃれつきまわる。たとえ野良であっても、餌を与え、撫でてくれる人間はちゃんと覚えているのだ。

いっぽうエントランスの植物たち。水をやり、枯れた葉をとり、毎朝世話しているのに、猫のような反応は返ってこない。私でなくても、たまに水をくれる他の職員だっているのだ。不満をもらした私に、「きれいな花を咲かせてくれる。それが、館長への一番のお礼ですよ。」

Sさんのひとことが、心にしみる。